

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年8月 第210号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

なぜ今、社会福祉法人間の「連携と協働」か？

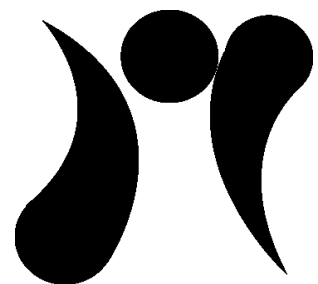
—「障・老・幼・児」は持続可能な地域社会の宝物—

加古川市域全体の地域福祉の充実を担って来た「社会福祉協議会」と、行政の委託を受けて「障害者福祉・老人介護・幼児保育・児童養護」の事業を担って来た民間の「社会福祉法人」が共に、平成29年度より「非営利・非課税の公益法人」としての「新たな体制」を整え、『公益的な事業展開』を模索しています。その一環として「加古川市社会福祉法人連絡協議会」を結成します。

公益法人の最大の特性は、非課税と同時に「税の寄付控除」が受けられる処です。行政への「ふるさと納税」と同じく、受取った「寄付金」は全て、公益的な事業に充当できるのです。社会が多様化する中で今は、セーフティネットとしての社会福祉事業を「株式会社」も運営します。株式会社は事業で得た利益を「株主に分配」する事で事業の拡大が可能に成りますが、「利益の分配」が出来なければ事業の閉鎖が求められ、残余財産は整理し分配します。しかし社福法人は、残余財産については『別法人への帰属』が定められます。

今『人生100年』時代を迎えた日本社会最大の課題は、「超高齢」と「超少子」が同時に、かつ急速に進行している処です。1947年には平均寿命が男性50才・女性54才でした。1990年には男性76才・女性82才、2016年には男性81才・女性87才です。一方で1947年の出生児数は270万人、1973年は209万人。2017年には94万人余となり、40年以上に亘りほぼ一直線に新生児が減っています。今70才代に差し掛かった団塊の世代は30年後にはその大半が世を去り、その頃には団塊ジュニアが後期高齢期に差し掛かります。その後20年～25年で高齢者の突出した人口ピークは無くなり、その後は先細りの人口構成です。今の様な少子化が続くと一気に「人口減少」が進行して、全国各地で社会機能の維持やインフラの保全が困難な状況が予測され、保育園も老人ホームも必要数は激減します。政府は今の少子化を『国難』と表現します。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

太古より人は「子を産み育てる喜び」を『本能』として受継いでいるはずですが、この40年程の間に「本能が退化した」かの様な状況です。「本能に何が起きているのか？」を真剣に問い掛け、「本能を取り戻す営み」を繰返さなければ、日本社会の歴史が途絶える危険性が大きくなります。人間以外の動物は、遺伝子で「命」を引継ぐと同時に、群を維持する「本能的習性」をも引継ぎますが、其の群は何年経っても「群」でしかありません。しかし人間の社会は絶えず変化し発展して、100年前、1000年前とは大きく異なる社会を築いて引継ぎ、歴史を続けて来ました。一人ひとりの「限りある」がつながって「社会を構成」し、「文化や文明」を生み出し引継ぎ、1000年～2000年と歴史を続けて来たのが人間社会です。遺伝子で引継ぐ「命と本能的習性」以外にも、人間には社会を構成する為に必要な「思想や社会性」を養い、其れを次世代に引継ぐ「社会的習性」が備わっている、と思えます。

自然の摂理に添って老いを迎えて「命の限り」が近づくと、人はその身の全てを仲間に委ねて「老いと死」の過程をつぶさに見せるのです。其の姿は、無防備な身を委ねる老人の「覚悟」と「仲間への信頼感」を顕すと同時に、その「覚悟と信頼に応える愛情」を必須とする「介護や支援」の行為を生み出します。その介護や支援を生み出す過程で人は「思想」を育み「人間性や社会性」を養います。その「思想と人間性・社会性」は、無防備な身で誕生する乳児を無条件に受容れる「親や大人達の愛情」を生み出し、幼子が親達に抱く「信頼感」を育みます。其の「老いと死の過程」と「乳児の誕生・成長の過程」で生まれる『信頼と愛情の循環』こそが、『人間の思想と社会性の原点』だと思えます。この40年間、その原点である「信頼に応える愛情」を見失い、不足した結果「バトンタッチ」が上手く成立せずに、今の少子化社会を創り出した、と思わざるを得ません。『信頼と愛情の循環』を踏まえた事業展開にこそ、社会福祉法人の『公益性の原点』と『社会的使命』が在る事を確信します。

老人介護の現場で何故「無条件に受容れる愛情」を見失ったのでしょうか？妊娠・出産・育児の過程で何故「胎児や乳児を無条件に受容れる愛情」が不足したのでしょうか？最期を迎える老人も、ダウン症の胎児も、障害を持って生まれる子供達も、「存在の全て」を「信頼する仲間達」に委ねて「社会人としての使命」を果たします。現在の「少子化リスク」は、その信頼に応える「愛情表現」への「鋭い疑問」であり『警告』だと感じます。彼らを支えるセーフティネットを張り巡らせて『国難』を乗り越えねばなりません。

「個人的」な「健康願望や予防意識」を優先する施策と世相の下で、委ねる身に「条件」が付き、ADLが低下して無防備になった身の存在価値が低いと考える人が多くなって不適切な愛情表現の人が増えた様に思えます。無防備な身を仲間に委ねて「社会人としての使命」を果たそうとする『命と暮らし』にこそ、尊重すべき『QOL（生命・生活の質）』が宿ります。

団塊世代が迎える「超多死社会」に備えて「老いの身の信頼に応える愛情」をよみがえらせ、「子を産み育てる喜び」がよみがえる社会を築く為に『公益性の原点と使命』を心に刻み、社会福祉法人間の「連携・協働・合同」の道を探ります。「障・老・幼・児」が少子化リスクを克服する為の『礎』と成り、『地域社会の活力』がよみがえります。



介護についてみんなで語ろう会【平成30年6月22日】 りょうえんカフェー番星（認知症カフェ）

せいりょう園老人介護支援センター 入江 良行

6月の介護についてみんなで語ろう会は、りょうえんカフェー番星（認知症カフェ）をしました。

せいりょう園では平成26年より、りょうえんカフェー番星を開催しています。せいりょう園内の施設に入居されている方々の殆どは、認知症者です。老いて出来なくなっていくことに対して初めは葛藤するも、暫くすると「仕方ないなあ〜。」と受け容れて、懸命に生きている人たちが多くのように思います。そのように受容する姿を私たち職員は介護する中で見ることが出来、感じ取れる機会に恵まれています。

参加された地域の皆さん、せいりょう園内の施設に入居されている高齢者の方々、職員が集い、最初は同じテーブルにいた人同士で挨拶をして、コーヒー、紅茶の注文を聞くことから始まりました。団欒の途中、園で収穫したすももを配り、食べる際「これ何やったかな？」「甘酸っぱいなあ〜。」「美味しいなあ〜。」と言いながら、色々と話を弾ませる人もいれば、その場の雰囲気を楽しんでいる人、途中で帰る人など、其々思い思いに過ごされていました。

地域の方より「テーブルごとで誰かリーダー的役割で司会のようなものをしたほうがいいでしょうか。」と聞かれたのですが、「仕切らないで、そのままの成り行きで行きましょう。」と答えました。その場で感じた想いを伝えることは、その人の人間性や本音が出るかもしれません。本音が出せずに悶々とする人、取り繕って話す人もいるかと思えます。しかし入居者の皆さん、特にカフェーに参加された認知症の方々は、その場の雰囲気を察知して自然と初対面の方々にも話しかけられ、相手が話しやすい表情・雰囲気を醸し出していたように感じました。認知症になると何も出来なくなるのではなく、余分なものが削ぎ落とされて、その人の持つ人間性が前面に出てくるように思います。

参加された地域の皆さんも認知症の方々と接して感じ取り、学ぶ機会があったように思います。カフェー終了後「えっ、あの人が認知症の方だったの？」と話す声が聞こえました。障害がある、認知症があるという先入観を持って相手に接すると自分が身構えてしまいそうです。その身構えが相手に通じて不安をもたらす事もあるでしょう。先入観を持たずに接することで相手も安心して、自然とお互いが穏やかに接することが出来るような気がします。



7月に入って、各事業所で流しそうめんをしました。利用者の方々に季節を感じられるイベントを、と始めて今年で4回目になります。

今年は昼食後に実施したため、利用者の方々は「お昼ごはん食べたあとやからお腹いっぱい食べられへん」「流しそうめんがあるなら昼ごはん食べなかったのに」と残念そうに言われていました。食べられないかなと心配しましたが、流れてくるそうめんを見つけると笑顔になって「きたきた。きたで」と言ってそうめんを食べられていました。疲れたら床机に座って談笑し、また竹の傍に寄ってそうめんをすくって食べていらっしやいました。「とても懐かしい。昔は近所の人と集まってよくしたんや」と昔話に花を咲かせる方がいれば、一生懸命流れてくるそうめんをすくって食べ続ける方もいて様々。それぞれの楽しみ方で夏の行事を満喫したひと時となりました。

（管理栄養士 田村 愛弓）



朝、利用者の方がデイサービスフロアに入られた時、真っ先に目に入るのが壁に掛けている大きなボードです。そこには、草花・樹木・動植物や行事及び風景など、時々季節を感じ取れるように、利用者の方々と共に制作した「ちぎり細工の絵」を掲示しています。一月は富士山に昇る「初日の出」を、二月は「紅梅」を題材にしました。

その制作過程は、洋菓子と和菓子の包装紙や広告ビラ等を、皆んなで大小様々な紙片（色紙）に破ります。破った紙片は色別に仕分けしストックします。次に色紙を選択する方、色紙を組み合わせてどんな配色にするかを考える方、そして、輪郭を描いた下絵の上に色紙を貼り付ける方が、ワイワイがやがやと言いながら制作する様子は、まるでひとつの家族のような雰囲気となっています。「独り家に居たら朝から晩までが長いねん。ここへ来たら一日が早いわぁ、ありがたいわ」とよく言われるのも、このようなアクティビティーでの雰囲気が心地良いのかなと思います。最後の「紅梅」の花の貼り付けは、目のご不自由な方にお任せしました。その方は、全体像を理解する為に左の手のひらで、色紙を貼り付けて木肌模様に仕上げた主幹と小枝を、そして既に貼り付けている紅い花を、上下・左右に触っていかれました。次に、最後の一輪はどの場所に貼り付けるのが良いかを決める為、右手のしなやかな指先でその小枝をなぞっていかれました。おそらく視力を喪失する前に見た梅の木を思い出しながら、ご本人の持っている想像力と創作力を発揮して、作品を完成させようと葛藤されていたと思われます。何度も迷われながら、ここぞと思うところに梅の花一輪を貼り付けられました。

13歳で全盲となられた、国立民族博物館の広瀬浩二郎准教授が、『視覚』に頼らない「触文化(しょくぶんか)論」という概念を提唱されていると知ったのは「加古川認知症の人と家族・サポーターの会」(通称:加古川元気会)が、設立8周年を記念して出版した「知恵袋」(サブタイトル:寄り添って思うこと)の編集作業が契機でした。

『博物館や美術館は「見る」ことを前提とした文化施設だ。子供も高齢者も、傷害者も晴眼者も「触れる」ことは誰でも出来る、だから誰もが楽しめる「ユニバーサル・ミュージアムの新展開」を』と、広瀬准教授は宣言されています。その趣旨は『「一目瞭然」や「一目惚れ」などと言うが、それは「視覚」による一瞬の情報取得に過ぎず、単なる表面的な理解に留まるのではないか。一方、「触覚」は手のひらや指が触れた「点」でしか情報が入手できない。でもその手のひらを上下、左右、前後に動かすことによって、点は線、面、そして立体へと広がり、徐々に想像を膨らませながら理解していける。視覚優位の現代は、目から入ってくる情報の量を重視する「木を見ずに、森を見る」時代だとも言える。だからこそ今、手の平が触れた部分から全体を組み立てる「触察力」、一本の木から森を描く「思考力」が求められるのではないか』と提言されています。

満101歳の方を始めとして、要支援・要介護度合いの違う方々が居られるデイのアクティビティーは、極力全員の方が参加できるものを心掛けています。見えない方でもランプのババ抜きゲームでは、隣に座っている方が手助けしてくれますし、百人一首の坊主めくりでは「姫が出たよ!」と教えてあげ、皆さんで一喜一憂されます。そして折り紙では、折り曲げる部分にそっと手を添える等、まさに「触れる」仕草をごく自然に発揮し、不自由なところをお互いに補いあう姿が、其処此処に見受けられます。

完成した「紅梅」を壁に掛けた時、「いやーエエやんか!」という歓びの声がフロアに響きました。机上で貼り付けする時は小範囲しか見えませんが、壁に掲示すると一瞬で全容が判かり、その

出来映えに拍手も沸きました。手と手を触れ合わせ、言葉を交わしながら作品を仕上げた事で、自然と皆さんの心と心が繋がっていき、仲間意識が高まるとともに、お互いの体調を理解して受け合う温かで家族的な雰囲気、今日もデイサービスのフロアに満ち溢れています。

参考文献

①「さわる文化への招待」[世界思想社]

②「ひとが優しい博物館」(ユニバーサル・ミュージアムの新展開)[青弓社]

【著者:広瀬 浩二郎・国立民俗学博物館准教授】



Kさんの看取り

地域密着型特養 吉田 貢平

Kさんは平成29年4月18日に地域密着型特養に入所され、平成30年5月20日に亡くなりました。約1年間にわたり地域密着型特養での生活に関わらせて頂きました。Kさんの生活スタイルはいつもベッドで休まれていることが多かったのですが、お茶の時間や食事の時間などは離床の声かけをして、リクライニング車椅子でサロンの方で過ごして頂いておりました。

入所して間もない頃、Kさんは日中でも眠気が強く、食事や水分が摂れないことが度々ありました。私や周りの職員もその状態を見て大変心配しました。その状態が続いたため、特養会議で話し合いました。なぜ日中に眠気が強いのかと様々話し合った結果、夜間で使用している眠前薬の影響で夜間だけではなく日中もウトウトしてしまっていることが多いのではないかという結論に至り、医師と相談して眠前薬の服用を中止しました。それから数日後、Kさんの日中の様子が変わりました。以前のような強い眠気はなくなり、目を開けて声かけをするとしっかり発語もみられるようになったのです。また普段は表情の変化が少ない方でしたが、食事の時間になると目を大きく開けて活気ある表情になり、自身でスプーンを使いものすごい速さで食事をされていました。その様子を最初に見たときは大変驚きましたし、Kさんにはこのような力が残っていたんだなと実感しました。

食事以外ではベッドからリクライニング車椅子に移乗する際、窓の方を見て手を振るしぐさがありました。Kさんにどこの誰に手を振っているんですか？と質問するも明確な返答がなく、何をしているのかわかりませんでした。私の推測なのですが、昔の家族や友人を思い出して、その方に手を振っていたのかもしれないし、私たち職員に何らかのメッセージを伝えようとしていたのかもしれない。

そんなKさんでしたが、亡くなる2週間程前から徐々に食事量が減っていき、発熱も頻発するようになり、平成30年5月20日に亡くなりました。約1年間しかKさんに関わることができなかったのですが、Kさんの生活を見てKさんにはどう関わり、何をしたら生きる力を引き出せるかということを学べた気がします。

介護職を続けていく上で、看取りは必ずあることです。終の住処として、施設で過ごされる利用者のために出来る限りの最善を尽くして頑張りたいと思います。



平成30年4月30日に亡くなられた T さんの看取りについて

地域密着型特養介護支援専門員 伊藤 洋子

T さんは、四国の香川県で生まれ育ち、平成5年4月に長女さんの居る加古川へ引っ越して来られました。香川では生活保護を受けられ生活されていたようですが、加古川に来られてからは、長女さんが働き T さんの生活を支えられていました。

一人娘である長女さんによると、生まれてすぐに小児麻痺となり両手指に障害を持ち不自由を感じて生活を送ってきた T さんに、子どもとして母親に出来ることはしたいという思いがある一方で、自分に依存している母親のことを重く負担に感じることもあったようです。

せいりょう園利用中、穏やかで社交的で、長女さんや職員に気を遣われながら、自身のペースで生活を送られていました。しかし、うつ病があり年に数回症状がひどくなり、その際には提供する食事・水分を摂らず、「はよあの世にいきたい」等の悲観的な話や、「物が無くなった」「〇〇さんに物を盗られた」等の訴えや、急に泣いたり怒ったり等がみられていました。長女さんは毎日のように T さんの好きな物を持参して面会に来られ、食事を介助し、T さんと話をして不安定な感情に寄り添っておられました。でもそのことで長女さん自身精神的に疲れ、追い詰められているような時もあり、1人では抱えきれず職員に思いを吐露されることもありました。私達職員は、T さんや長女さんにどれほど寄り添うことが出来ていたのかなと思います。

T さんは、個室がよいとのことでユニット型特養に入所されていましたが、平成29年5月頃に長女さんが働けなくなり金銭的に支えることが難しく、生活保護を受けることになり、多床室である長期ショートステイを経て地域密着型特養に移られることになりました。それまでは、長女さんや職員に「四国に帰りたい」「個室がいいけどここ（ユニット型特養）は嫌や」等話されることもあり、その度に職員と話をしたり長女さんに説得されたりしていましたが、多床室に移る際は、経済的なことや長女さんの状況について話を聞き、納得された上で移られました。

せいりょう園で生活された約6年半、徐々に身体レベルが低下され、思うようにいかないことも多かったであろうその中で多床室へ移り最期を迎えられました。多床室に移られてからの約1年間は、ご自身の最期の瞬間をご自身で受け容れる時間だったのではないかと思います。

私は、今年の4月にユニット型特養から地域密着型特養へ異動となり、T さんとも長女さんともいろいろと話をさせていただき関わらせていただきました。時には、T さんの話を聞き、長女さんからの思いを聞き、その時々で話を聞くことは大事なことはあるが話を聞くことしか出来なかった自分に「これでいいのか？」と悩んだりすることもありました。また、話を聞くことで、介護支援専門員として介護職員として考えさせられることも多かったように思います。



～平成30年7月28日（土） 第33回納涼盆踊り大会～

今年の納涼盆踊り大会は進路の読めない台風が接近していたこともあり、急遽規模を縮小し、開園以来3度目の室内での開催となりました。歌手の晴香うららさんや屋台を出店してくださった方、利用者さんやご家族が共に盛り上げてくださったおかげで無事行うことができました。限られた場所の中での開催となり、ご迷惑をお掛けしたかもしれません。ご協力ありがとうございました。（イベント委員会委員長 新田 悦子）

Tさんの看取りを通じて学んだこと

地域密着型特養 米田 倫加
(介護福祉士)

Tさんは平成28年1月17日からせいりょう園のロングショートステイを利用されてきました。私がTさんと出会ったのは昨年(平成27年)の4月です。先輩職員にTさんは言われたことをほとんど反対の言葉にして返す方だと教えてもらいました。野球が好きな方だと聞いたため、「テレビで野球していますよ。ご覧になりますか？」と声をかけるとTさんは「観ません」と言われました。しかしテレビの前に誘導するとじっとテレビを見つめて野球を観戦されていました。これが私とTさんの初めての関わりでした。

元々Tさんは自身のご家族にも話しかけることは少なく、口数の少ない方だったそうです。園で生活し始めてからも自身からほとんど訴えやお話しされることはなく、こちらから話しかけるといつも反対の言葉で返されていました。例えば「ゆっくり休んでくださいね」と声をかけると「休みません」、ご家族が面会に来られた際もご家族が「また来るね」と言うと「来んでええ」といった返事をされていました。

そんなTさんは食べるのがとにかく好きな方で、いつも自身で全てを食べられていました。しかし徐々に食べこぼしが増えるようになり、姿勢が崩れ、自身で食べるのが難しくなりました。それでもスプーンを口元に持っていくと大きな口を開けてスムーズに食べていらっしかったです。やがてむせ込むようになり、ゴロゴロと痰が絡む音がするようになりました。食事介助の際、「大丈夫ですか？」と声をかけると「大丈夫」と反対の言葉にされずに返してこられたのがとても印象に残っています。今思うと大丈夫ではなかったからこそTさんらしくその反対の言葉で「大丈夫」と伝えていたのではないかと思います。

平成30年3月25日の朝、食事を終えてからしばらくして容態が急変し、先輩職員が対応してくれましたがそのまま息を引き取られました。85歳でした。私はいきなりのことで驚いてしまい何もできませんでした。

最期が近い方は食事量が徐々に減っていき、水分も摂れなくなることが多いのですがTさんは最期まで食事をしっかり摂られ、Tさんらしい最期を迎えられたと思います。Tさんの好きな「食べること」を最期まで続けることができ、自身のベストを尽くして人生を締めくくられたTさんの姿はどこか誇らしげな感じがしました。

人生の締めくくり方は十人十色。何がその人にとってベストなケアなのか、その人は何を望んでいるのか、しっかり考えてお一人おひとりの利用者に向き合いたいと強く思いました。

夏といえば花火！デイサービスにも大輪の花が…

放射線状に広がる光跡は、色紙をこより状にし、飛び散る大輪の花は広告や包装紙等を細かく破って夫々貼り付けました。「加古川の花火は、家の庭に床机を出して座って見ていたんやで。今は田んぼに家が建込んで見えへんわ」と、昔の風情を思い出しながら創りました。なお、花火が散開する『漆黒の夜空』は、書道教室の土井先生が、余った墨と墨汁を有効活用して塗って頂きました。何時もながらデイは、様々な方々が応援してくださいませ。

(デイサービス 小山 寿美男)



【求人】

①デイサービス生活相談員

8：45～17：45の週3～5日勤務で、送迎ができる方。

②デイサービス介護職

13：45～17：45の週3日勤務で、送迎ができる方。

年齢・資格は問いません。

③訪問介護員（ホームヘルパー）

16：00～18：00の週3～5日勤務で、食事介助や移乗介助ができる方。

④介護支援専門員（ケアマネジャー）

8：45～17：45の週5日勤務。経験は問いません。



※詳しくは、せいりょう園Tel (079) 421-7156までお問い合わせ下さい。

【サービス付き高齢者向け住宅入居者募集】

全室にバス・トイレ・キッチンが付いており、介護が必要になっても在宅サービスを利用しながら、最期まで自分のお部屋で暮らせます。

①リバティかこがわ：7室

[33㎡：3室 35㎡：2室 39㎡：1室 41㎡：1室]

家賃：87,000～110,000円（入居時に敷金：家賃の6ヶ月分）

共益費：10,000円 サービス費：20,000円（状況把握や生活相談）

②自愛の家さくら：9室

[19.1㎡：3室、20.4㎡：1室、24.7㎡：3室、25.8㎡：2室]

家賃：54,000～77,000円（入居時に敷金：家賃の6ヶ月分）

共益費：10,000円 サービス費：20,000円（状況把握や生活相談）



↑24.7㎡ ミニキッチン・フロア



↑19.1㎡



↑トイレ・バス

【問合せ先】 せいりょう園 Tel(079)421-7156 / (079)424-3433

【せいりょう園空き情報 平成30年8月15日現在】

●グループホーム：1室（15㎡：家賃43,000円）

●グループホームまどか：空きなし ●ケアハウス：空きなし

